

ユダヤ・ディアスポラとイスラエル国家、 そして難民的存在としてのパレスチナ人

早尾 貴紀

キーワード：ディアスポラ、ユダヤ、イスラエル、パレスチナ、難民、エドワード・サイード、シオニズム、アイデンティティ

はじめに

「ディアスポラ」と言えば、一般にはまず「ユダヤ・ディアスポラ」を指すものとされる。バビロン捕囚と古代エルサレムの神殿崩壊以降の、ユダヤ人離散を意味するわけであるが、次にそこから派生して他の民族の離散状況についても比喩的に「ディアスポラ」という表現が用いられるようになり、この用語はやや一般化してきていると言える。ところで、ユダヤ人国家を建国することで、ユダヤ人の離散状態を終焉させようとするシオニズムは、端的に「ディアスポラの否定」と呼ばれる。本稿においては、現代イスラエル国家の建国という出来事とディアスポラとがいかなる関係にあるのか、またそのことによってパレスチナ・アラブ人が新たな「ディアスポラ状態」に置かれることになったわけであるが、「パレスチナ人ディアスポラ」とはいかなるものなのかを、検討したい。

1 ユダヤ人ディアスポラとシオニズムの関係、そしてパレスチナ人ディアスポラ

1-1 ユダヤ人国家の矛盾

世界各地に離散している状態つまりディアスポラにあるユダヤ人を一箇所に集結させることで、一つの領土的まとまりをもったユダヤ人国家を建設しようという運動は「シオニズム」と呼ばれる。近代化の中で反ユダヤ主義が強まっていった19世紀末のヨーロッパにおいて、シオニズム思想は生みだされ政治運動へと発展していった。この思想運動の中では、ユダヤ人差別はそのディアスポラ状態そのものに起因するも

のとされ、その解決はディアスポラを否定し終焉させることに見いだされた。具体的には、「シオンの地＝エレット・イスラエル」に「帰還」をするというユダヤ教の物語を、政治イデオロギーへと転化させることで国家建設を実現したのだ。そのことで「ディアスポラの民」であることをやめて領土国家の主人公つまり「国民」になったのであり、その意味では、シオニズムは近代のナショナリズムの一形態とも言える。

だが、そのナショナリズムは、世俗ナショナリズムなのか宗教ナショナリズムなのかという、ユダヤ人のアイデンティティの根幹に関わる問題を、本質的に含み込んでいた。初期シオニズム運動を19世紀のヨーロッパで立ち上げていったユダヤ人らは、ヨーロッパの国民国家体制のもとにいて、そこから「非国民」として排除されると同時に、そのヨーロッパの近代化から大きな影響を受け「国家」や「国民」というものを強く意識した、世俗的な非宗教的なユダヤ人であった。もちろんそれとは別にそれ以前から、宗教的信仰から聖地であるエルサレムやティベリアなどに移民をしたユダヤ人はすでに存在した。しかし、それは個人の信仰に基づくものであって、国民国家・領土国家をつくるべく大規模に移民の入植活動をするのとは異質なものだ。そうした意味では、ユダヤ教から国家が生まれたのではなくて、むしろあまり宗教的ではない世俗的なユダヤ人がヨーロッパから排除されるのと同時に、その外に別の近代的な国民国家を、つまり「均質な国民」というフィクションを共有した国家をつくろうとした、という図式が認められることになる。

現在も、イスラエルでは「シオニズムの父」としてあがめられているテオドール・ヘルツルは、一度は世界シオニスト会議で、東アフリカの現在のウガンダの場所にユダヤ人国家を建設

するという決議を得た人物である。もちろん「聖地」を重視する勢力からの反対意見もあったが、ヘルツルは国際的な政治力学の中で、ヨーロッパ諸国の支持・支援が得やすく、人口密度から言って先住民からの反発が「比較的小さいだろう」と一方的に決めつけただけで、ウガンダ案以外にも、南アメリカやシナイ半島などについても検討していた。このように領土国家とそこでの近代的な国民形成を優先するヘルツルや、その流れを汲む人びとは、国際的な政治交渉を重視しており、そのため「政治シオニスト」と呼ばれる。「建国の父」とされる初代首相のダヴィッド・ベンゲーリオンをはじめとして、結局のところ「ユダヤ人国家」建国を主導した人びとがその流れに入ることから、イスラエルという国家はかなり世俗ナショナリズムによって成立した国家であると言える。

これに対し、純粋な「ユダヤ人国家」に反対したシオニストも少数ながら存在した。彼らも、シオニストである以上ユダヤ人の移民・入植は認めるが、一定の領土を排他的に独占し、ユダヤ人のためだけの国家建設をするという思想・運動には反対した。彼らの主張では、エルサレムや「エレッツ・イスラエル」はユダヤ人にとって、宗教的・精神的・文化的に重要ではあるが、そこを排他的に独占することは間違っていると、政治シオニストらとは対立し、先住アラブ人との共存を模索した。この流れには、ヘルツルと対峙したアハド・ハーアム、またベンゲーリオンと対峙したマルティン・ブーバーが入り、彼らは「文化シオニスト」と呼ばれる⁽⁴⁾。結局は、「共存すべし」という呼びかけよりも、「われわれ自身の国家を建設しよう」と煽情的に叫ぶ政治シオニストのほうが、人びとを強く魅了し、文化シオニストらによる二民族共存への呼びかけは、劣勢だった。

しかし、「ユダヤ人国家」は成立後も、さまざまな矛盾を内部にかかえこむことになった。ユダヤ人だけの国家であらねばならないという理念は、そのユダヤ人であるということの内実である思想や文化といったものを重視しない世俗的な政治シオニストによっては担保されないという問題がある。主流であったはずの政治シオニストによってではなく、傍流でしかない文化シオニストによってこそ「ユダヤ人国家」の内

実が与えられてしまう、という逆説が内在しているのだ。たんなる普通の一国民国家になるのか、ユダヤ人でなければ国民になれない特殊な国家になるのかという、あえて言えば普遍性と特殊性の解きたい矛盾の中で、政治シオニストと文化シオニストは、相互に緊張関係と補完関係を維持していた。まずこれが「シオニズム内の矛盾」である。

もう一つ、そもそもユダヤ人の文化が「均質な国民文化」などというものと親和性があるのかという問題がある。ディアスポラにおいてこそユダヤ人が持つことのできた多様な文化を、国民文化は否定してしまうことになる。シオニズムは「準ヨーロッパ」という基盤を幻想としてあれ最初は共有していたが、たんなる移送・排斥を超えたナチスによるユダヤ人の虐殺（ホロコースト）という計算外の出来事によって、来るべきユダヤ人国家を支えるはずだった人口的な基盤を失ったことにより、イスラエル建国後は非ヨーロッパ圏からのユダヤ人を移民として大量に受け入れざるをえなくなった。どの地域からの移民が多いかは時代によって異なるが、モロッコやイエメン、イラク、イラン、トルコなどの中東圏、ロシア・ウクライナなどの旧ソ連圏、アルゼンチン・ウルグアイ、ブラジルなどの南米圏などからも大規模な移民を受け入れてきた。むしろ「受け入れる」というよりは、ユダヤ人たるものはすべからずエレッツ・イスラエルに物理的に移住すべきだ、と呼びかけて移民を結集させるのがシオニズムであるとも言える。ところが、他方でイスラエル国家は、準ヨーロッパであると自ら称しかつそう信じられているために（もちろんそれは文化的なアイデンティティだけの問題ではなく、政治的・経済的・軍事的な欧米の支援体制も大きく作用しているのだが）、ヨーロッパ以外の地域出身のユダヤ人はヨーロッパ・ユダヤ人に従属させられ、二級国民として差別されながら「イスラエル国民」になるという現実がある。つまり、ヨーロッパ的ナショナリズムであるシオニズムの下で、各地で培われてきたディアスポラのユダヤ人の文化は否定されてしまうことになるのだ。それはつまるところ、ユダヤ文化そのものの否定でもある。シオニズムがユダヤ文化を否定することは、ユダヤ性を否定するところにこそ

イスラエルが成立しているということの意味する。つまり、シオニズムは、原理的にユダヤ教とのあいだに矛盾をかかえこまざるをえないのである。

1-2 パレスチナ人ディアスポラ

このシオニズム運動のために、先住民であるパレスチナ人の難民化が始まった。現在のイスラエル領に住んでいたアラブ・パレスチナ人らは、ヨルダン川西岸地区やガザ地区、さらにはレバノン・ヨルダン・シリア・エジプトへと避難せざるをえなかった。こうした避難民の多くは一時的な避難のつもりだったが、イスラエル建国につながる1947～49年の戦争においても、西岸・ガザ地区の全面占領につながる67年の戦争においても、結果的に帰還不可能な恒久的難民になり、しかも広範な地域に離散させられた。生活のために後に湾岸諸国や欧米に移住した者も少なくない。パレスチナ人はまさに「ディアスポラの民」となったのである。

ここで、「パレスチナ人」とは誰か、という問題に直面する。とくに1993年のオスロ合意以降10年が経過したことで、「パレスチナ」は次第にイスラエルの脇にある西岸地区とガザ地区を合わせたパレスチナ自治区であり、「パレスチナ人」とはそこに住む人であると理解されるようになった。しかし、実際には、政治体制による分断、地理的な分断、世代的な分断によって、「さまざまなパレスチナ人」が存在する。そのディアスポラ的なアイデンティティのあり方が現在、問われ始めている。そもそもパレスチナ人であるという自己意識は、いつ頃からどのような形で出てきたのか。これにはさまざまな見解があり、実のところ、ナショナリティと同義のものとしてのパレスチナ人アイデンティティは、いまだに成立しているとは言い切れない側面がある。

地理的な分断から言えば、まず国外難民とパレスチナ自治区との断絶がある。そしてイスラエルが併合を主張している東エルサレムは、自治区からは切り離されつつも、イスラエル国民としては認められないという谷間に落ち込んでいる。他方で、1948年以降にイスラエル領となった地域では、イスラエル国籍を持つアラブ系国民（この場合、ミズラヒムとして知られている、アラブ世界から移民をしてきたユダヤ人

「アラブ系ユダヤ人」を除く）が、人口の20パーセントを占めている。

こうした地理的な分断が、何十年と固着化し既成事実が積み重ねられることで、世代的な分断が生じている。一方では、見たこともない故郷を想いつつ難民キャンプで生まれ育った世代が次々と現れている。他方、イスラエル国内では、先住アラブ人のマイノリティが、「非ユダヤ系イスラエル国籍者」という否定的な表象を負わせられ、自らパレスチナ人意識を肯定することができなくなっている。背負っている経験の差は大きい。

また、単なる地理的な分断を超えた政治体制による分断もある。ヨルダンは90年代に入るまで西岸地区を自国領と見なしており、西岸のパレスチナ人にもパスポートを発給していた（時期によっては厳しいパレスチナ人弾圧もしていたが）。しかし、レバノンのパレスチナ人は、国籍を持ってないばかりか、難民キャンプの出入りさえ嚴重に管理されていた。エジプトにいたっては、パレスチナ人難民の存在すら公式には認めていない。ある意味では、イスラエル国籍を持っているアラブ・パレスチナ人がもっとも政治的権利を保障されているとも言える（それが、民族として尊重されることを意味しないのは言うまでもない）。

だが、避難せずに故郷の村に住み続けたまま、いつの間にかマイノリティになったイスラエルのパレスチナ人は、二級市民という扱いを受けているにもかかわらず、イスラエルの外にいるパレスチナ人の側には、「彼らは半ばユダヤ人になってしまった」とみなす逆差別的な意識もある。パレスチナ問題が国際的な注目を浴びた時にも、イスラエルのパレスチナ人は置き去りにされた存在であった。彼らは国連の定義では難民とは言われないが、実質的には難民的存在であると言える。またイスラエル領となった地域の範囲内で避難し再定住した人びとも少なくはなく、その意味でも難民であることは確かである。こうした視点は、いわゆるパレスチナ問題からは落とされてきた。

このように、「パレスチナ人」という集団的な存在の外延は、いわゆる領土国家において想定されている国民のように明確に見えるものではなく、かつ自己意識としても、パレスチナ人と

してのアイデンティティを持つことが困難な状況に置かれている。「ディアスポラ」という用語が離散を意味するのであれば、パレスチナ人が置かれている現状こそが、その用語で表現されるにふさわしいと言えるだろう。

2 「ディアスポラ」という用語をめぐる⁽²⁾

2-1 「ガルト」から「ディアスポラ」へ

冒頭で確認をしたように、「ディアスポラ」とは、ユダヤ教・ユダヤ人に端を発する概念であると理解されている。つまり、バビロン捕囚と神殿崩壊以降のユダヤ人の離散状況を意味するとされるのだ。そのような前提に立てば、「パレスチナ人ディアスポラ」という用法は、ディアスポラ概念の転用・普遍化としては画期的な一例であるように思われる。

だが、事はそう単純ではない。ユダヤ教においてディアスポラとして語られているものは、本来はヘブライ語では「ガルト」と呼ばれ、それは地理的な離散状況を意味するものではなく、神学的・終末論的な概念である。つまり、神によって追放の罰を受け離散状況にあるユダヤ人は、最後の審判の日にメシアが到来し、神殿が再建されイスラエル（現代イスラエル国家ではない）が復活するまでは、救いがあるかどうかを確信することなくただ律法を守って正しく生活することで現世を過ごすしかない、というものだ。つまり、ガルトの意味における離散は、現世において人為的に終わらせることは不可能であり、たとえエルサレムの地にいようとガルト的な離散は終わらないのだ。

これに対して、ヨーロッパ言語で使われている「ディアスポラ」というギリシャ語源の言葉は、あるエスニック集団がマイノリティとして国境を越えて散らばっている状況を指す。つまり、空間的概念なのだ。時間的概念が強いガルトとは、まったく意味が異なる。

いつからディアスポラが、ユダヤ人の離散状況を指すようになってしまったのか。これについてはいまだ十分な実証的研究がなされていないが、エフライム・ニムニが『「ガルト」から「トゥフツォット」へ』の中の一節で、概略的ながら鋭い指摘をしている⁽³⁾。ギリシャ語の「ディアスポラ」が、「ユダヤ人離散（ガルト）」

を表現する言葉として「翻訳＝誤訳」されたのは近代シオニズム思想の中においてであり、しかもそれは意図的な意味のすり替えであったという。「エレット・イスラエル」を領土的意味に限定された現代ユダヤ人国家にスライドさせ、「ガルト」的な追放状態を、領土的な世俗国家に移住をすれば解消可能な、地理的な離散状況としての「ディアスポラ」へと意味を変換した。つまり、「ユダヤ人ディアスポラ」という表象はそもそもの初めから、「シオニズム運動によって解消されるべき離散状態」として、近代になってから生み出されたものであることになる（これに対して、もともとのギリシャ語の「ディアスポラ」に該当するヘブライ語が、ニムニの論考のタイトルにある「トゥフツォット」である）。

しかし、逆にその観点からディアスポラ概念の可能性を論じる道も開けているように思われる。つまり、ディアスポラの離散はユダヤ人に特権的なものではなく、地理的な離散を表す用語としては、最初から普遍性を兼ね備えていたとも言えるからだ。例えば、パレスチナには Palestine Refugee and Diaspora Center という名称のNGOもあり、またGlobal Diaspora叢書の中に、Palestinian Diaspora⁽⁴⁾ も刊行されているように、実際、「パレスチナ人ディアスポラ」という言葉は、かなり広く使われ始めている。

2-2 サイドの転向

このことを象徴する一つの事例として、アメリカに在住していたパレスチナ人思想家エドワード・サイドが、「ディアスポラ」という言葉を使うことを拒否していたのを翻意したことを考えてみたい。サイドが故郷喪失的な状態を表現するのに、ユダヤ的なニュアンスを多分に含む「ディアスポラ」という用語を避けて、もっぱら「エグザイル」を用いてきたことは知られている。サイドはあるインタビューで、次のような受け答えをしていたことがある⁽⁵⁾。

インタビュアー：ユダヤ人は神話的な場への集団的ノスタルジアを表すために「ディアスポラ」という用語を使用しました。パレスチナ人の中にもこの用語を採用している人もいますし、パレスチナの地からの追放を言い表すのにその用語を使用している

人もいます。あなたは、パレスチナ人がこの用語を用いる場合に他の意味を含むと考えますか？ とりわけ、パレスチナ人のエグザイルが地理的存在から、つまりまさに現実の場所からのものであるときの含意のことです。ここで言う「現実の」というのは、彼らがいまだに鍵を持ち続けている家から追放されたということを示しています。パレスチナ人が用いるのに提案できる、「ディアスポラ」以外の別の用語があるでしょうか？

サイド：アラビア語では、私は「シャタート（分散）」という言葉を使っています。私がずっと、想像上の神話に基づいた多くの用語について警告や批判を行なっているにもかかわらずです。私は、当然ながら「ディアスポラ」という用語を拒否してきました。しかし、この用語が使用されることを阻むことはできません。ユダヤ人たちは、自分たちの想像力を満たすためにこの用語を使ってきましたが、私たちはそれとは異なるパレスチナ人の状況について語っているのです。パレスチナ人の置かれている状況とパレスチナ人が望む社会は、パレスチナの民族に固有なものなのです。

これ以上の詳しい説明はないために、「ディアスポラ」という用語そのものが、シオニズム的誤訳の産物であることをサイドが知っていたのかどうかは確認できないが、ともあれサイドは明確に「ディアスポラ」という用語の拒否を宣言している。

他方で、サイドには、ヨーロッパの中でマイノリティの思想であると同時に普遍的思想を生みだしてきたユダヤ思想を受け継いでいるという自覚が強い。とりわけ、テオドル・アドルノという名前に頻繁に言及し、さらには自分がアドルノの最後の弟子であり、「ユダヤ系パレスチナ人」であるとさえサイドは自認している⁶⁾。あえて、ユダヤとパレスチナという一般的には対立するものとされている二つの名称を結びつけて、その対立構図そのものを突き崩しているのである。ユダヤ性そのものを拒絶しているわけではないのは明らかだ。「ディアスポラ」という用語と距離を保ってきたことには、シオ

ニズムとの関係を考慮すれば、結果的には一定の妥当性が認められるだろう。

ところが、サイド自身が、最後の著書となる『フロイトと非・ヨーロッパ人』（2003年）の中で、ディアスポラを肯定的に使い、はっきりとこの用語の普遍的意義について触れているのだ⁷⁾。それまでの姿勢を180度転換したとさえ言えるだろう。サイドは、アイザック・ドイッチャーの「非ユダヤ人的ユダヤ人」について論じつつ、その「取り返しのつかないディアスポラ的な、故郷喪失的な性格」（*FNE*, p.53）を重要なものとして挙げ、さらに続けて「ディアスポラ」概念を積極的に広げて使う可能性にまで言及する。

これ [=ディアスポラ的な、故郷喪失的な性格] はユダヤ人の特徴としてのみ見る必要はない。難民、亡命者、国外居住者、移民などの膨大な人口移動の時代においては、自らの共同体の内側と外側の両方にまたがって生きる人の、ディアスポラ的で、流浪的で、一つところに定まらない、コスモポリタンの意識として見なす [identify] こともできる。（*FNE*, p.53）

これは、これまでの用語としての「ディアスポラ」を拒否する姿勢を、明らかに覆すものである。なぜサイドがここでディアスポラという用語を肯定的に語り始めたのか。

サイドが避けていたはずの「ディアスポラ」の使用を自らに許したのは、そのシオニズム的バイアスを取り除いたときに、ギリシャ語の「ディアスポラ」の原義を活かすことができるようになると思ったからではないか。概念の転用可能性・普遍化可能性は、ディアスポラという言葉の本質にも認められる。また「非ユダヤ的ユダヤ人」という逆説的な表現に見られるドイッチャーの思想は、ディアスポラ状態にあるユダヤ人こそが真のユダヤ性を持っているとするものだ（逆に言えば、イスラエル国家はその否定である）。故郷喪失による難民的生を肯定するサイドにあっては、ディアスポラの肯定は今さらと感じられるほどに当然のことであると言える。

おわりに

サイドは『フロイトと非ヨーロッパ人』の最後で、ディアスポラ的な生のための政治の条件はパレスチナの地における二民族共存国家の基礎になりうると述べている (FNE, p.55)。サイドは、1993年のオスロ合意による二国家解決による和平案を批判する中で、その対案として「一国家解決」をあえて提示した。主題的に二民族共存の思想を明示したのは1999年の論考「一国家解決」⁽⁸⁾であったが、そこにしか解決を見いださえない必然性が消極的に語られていたのではなく、歴史的な多様性の承認と、双方の民族自決権の同時的な尊重とによる、前向きで魅力的な思考として提示されていた。サイドは、最後の最後までそれを、現実的政治の中でビジ

ョンとして提示するだけでなく、思想史的にも深化させることを、相互補完的に探求していたに違いない。

パレスチナ人は、アラブ世界からも時に皮肉を込めて「アラブのユダヤ人」と呼ばれてきた。その呼称には、パレスチナ人の故郷喪失性や土地を離れた離散パレスチナ人のネットワーク性や卓越した知識人の排出などが、離散ユダヤ人の特徴に重ねて見られたという事情と、物理的にイスラエル国家・ユダヤ人の隣人として日常的な関係を避けえないという事情が複合的に働いているだろう。だが、その皮肉は、もう一度反転して、普遍的なディアスポラの可能性へと開かれるのである。「パレスチナ人ディアスポラ」は、そのような逆説をも内在させていると言えるだろう。

-
- 1 文化シオニストらの二民族共存国家論については、拙稿「思想史の中のイスラエル3 二民族共存国家論——アレントとブーバーのあいだ」『現代思想』2002年6月号参照。
 - 2 この節は、拙稿「エクソダスの政治学——サイドと「非ユダヤのユダヤ人」」『現代思想 総特集 サイド』2003年11月臨時増刊号、と一部議論が重複している。
 - 3 Ephraim Nimni, "From "galut" to "t'futsoth"; post-Zionism and dis-<location of Jewish diasporas", edited by E. Nimni, *The Challenge of Post-Zionism: Alternatives to Israeli Fundamentalist Politics*, Zed Books, 2003のとりわけpp.131-134参照。
 - 4 Helena Lindholm Schulz, Juliane Hammer, *The Palestinian Diaspora: Formation of Identities and Politics of Homeland*, Routledge, 2003
 - 5 Edward W. Said, "Orientalism, Arab Intellectuals, Marxism, and Myth in Palestinian History", *Power, Politics, and Culture: Interviews with Edward W. Said* (edited by Gauri Viswanathan), Pantheon Books, 2001, p. 442
 - 6 Edward W. Said, "My Right of Return", *ibid.* p.458 [エドワード・サイド「帰還の権利」田村由香訳、前掲『現代思想 総特集 サイド』、20ページ]
 - 7 Edward W. Said, *Freud and the Non-European* (introduction by Christopher Bollas, response by Jaqueline Rose), Verso, 2003 [エドワード・サイド『フロイトと非-ヨーロッパ人』(長原豊訳)、平凡社、2003年]。なお引用は拙訳により、以下引用ページは書名の略称FNEに続けて原文のみを記す。
 - 8 Edward Said, "One State Solution", *New York Magazine Weekly*, Jan. 1999 (増補改題して"Truth and Reconciliation"としてEdward W. Said, *The End of the Peace Process: Oslo and the After*, Pantheon, 2000に集録) [エドワード・サイド「一国家解決」(早尾貴紀訳)、『批評空間』第3期第3号、2002年、95~96ページ]